

## 一九一一年デリー・ダーバーとジョージ五世

— 国王Ⅱ皇帝によるインド社会との対面的コミュニケーションの試み —

本田 毅彦

## はじめに—一九一一年ダーバーの背景

ベンガル分割反対運動の激化を受け、モーレー・ミンター改革を一九〇九年から実施するなど、イギリス植民地権力側は、インド社会において市民社会的な政治空間を拡充させる方向へと舵を切った。<sup>(1)</sup>しかし、それと同時に、とりわけイギリス王室およびそれに近い位置にあった人々は、ベンガル反対運動の高揚を目撃する中で、インド社会では宗教にまつわる事象が極めてデリケートな課題であることを改めて認識し、そうしたありようを、英領インド帝国という政治枠組を正當化するための主要な根拠として打ち出さうる可能性にも、気付き始めた。だが、肝心の、行政的判断としてのベンガル分割そのものに関しては、イギリス側の威信に関わる問題になっていたため、強硬に維持された。

そうした中、短い在位期間でエドワード七世が死去した後、帝国、とりわけインド植民地の統治に強い関心を抱くジョージ五世が即位した。<sup>(2)</sup>ジョージ五世は、王室にとって帝国の統治が、王室の存在意義を強調する主要な舞台となっていることを認識していた。そのため、一

九〇三年ダーバーによって立証された政治儀礼の効果を再現するべく、自らがインドへ赴いてデリー・ダーバーを主宰し、ベンガル分割の撤回とカルカッタからデリーへの遷都を発表することで、インド社会全体との間で新たな「契約」を結ぼうと決意するに至る。

一九〇三年の時点では、そもそも、インドにおいてイギリス本国とは別に、即位に関わる式典を行うべきなのか、が議論された。しかし今回は、インドでのダーバーの実施は、エドワード七世の死の直後から既定の方針だった。新たな国王Ⅱ皇帝であるジョージ五世が、いわばインドへ「行く気満々」だったから、である。ジョージ五世は、イギリスの君主制ないし伝統的支配層が二〇世紀を生きのびていくために、「カーゾンのダーバー」が極めて有効な戦略的展望を開いたことを評価していた。<sup>(3)</sup>しかし、その実施の仕方に関して、個人的な不満を感じていた（カーゾンが、主役であるはずの王室をないがしろにしているのではないか、「インド帝国」という政治枠組を強調し過ぎているのではないか、などの疑念を抱いていた）。従って、彼自らがインドへ赴いて主宰しようとする一九一一年ダーバーでは、「インドという多元的社会の安定を保証する、ムガルル皇帝の後継者としての国

王Ⅱ皇帝の權威」をイヴェントの中でアピールする、というカーゾンの戦略を踏襲しながらも、帝国統治に関してカーゾンが示した、ある種の過度な熱意を是正し、そのせいで生じた、インド社会の一定部分との深刻な対立に関して、和解を演出しようとした。そして彼の目論見どおり、国王Ⅱ皇帝自身がインドを訪問して即位に関わる儀礼を主宰するという事實は、一九〇三年ダーバーの際と比べて、様々な意味で、それに勝るとも劣らない大きなインパクトを、インドを含む諸社会に及ぼすことになる。<sup>(4)</sup>

結局のところインド副王を主役とせざるをえなかった、これまで二回のインペリアル・ダーバーと比べれば、国王Ⅱ皇帝の姿がそこにあるだけで、イヴェントとしての「オーセンティシテイ」は飛躍的に高まるはずだった。また、一九〇三年ダーバーの政治的功利性が、カーゾンを除く、他の多くのイギリス人たちの眼にはやや曖昧なものであったのに対して、一九一一年ダーバーに関しては、主役であるジョージ五世が明確な目的意識を持ち、それをこのイヴェントによって実現することに賭けており、ジョージ五世の周辺にいたイギリス本国の政治家たちも、そうしたジョージ五世の意識を共有するようになっていた。すなわち、ジョージ五世がインドを訪問する以前の段階では、「英領インド帝国というイメージ」は、ベンガル分割令の施行とそれに反発するインド・ナショナリズム運動の高揚のせいで大幅に毀損されてしまっており、イギリス側としては、それを早急に償う必要に迫られていた。<sup>(5)</sup>一九〇三年ダーバーが、国王Ⅱ皇帝の不在にも関わらず、「英領インド帝国というイメージ」の促進に大きく成功したのだとすれば、新たな国王Ⅱ皇帝自身がインドに登場し、豪華なイ

ヴェントを再現する中で、「一九〇三年ダーバーの後に生じてしまった過ち」を自ら正すことによって、そうしたイメージを復活させ、さらに強固なものにすることも可能であるはずだ、と考えられていた。

また、一九一一年ダーバーは、その渦中に英領インド帝国も巻き込まれるかもしれない、世界的変動が近いのではないか、との予感の中で行われてもいた。<sup>(6)</sup>一九〇三年ダーバーの直後、アジアにおけるイギリスの振る舞いをコピーしようとする日本が日露戦争に勝利し、朝鮮半島を手に入れていた。そして、事実上の植民地総督・伊藤博文が一九〇九年十月にハルビンの駅頭で朝鮮人に暗殺されたのを奇禍として、一九一〇年八月には、日韓併合を実行した。一九一一年七月には日英同盟の改訂が行われ、十月には辛亥革命が起り、数カ月うちに清王朝の命脈が絶たれることになった。他方ヨーロッパでは、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が、トルコ人のナショナリズムとイギリス国内のムスリムたちの反イギリス感情を利用することで、イギリス帝国を弱体化させることを目論んでいた。<sup>(7)</sup>

つまり、一九一一年ダーバーは、世界情勢の緊迫化を意識し、ロイヤル・イヴェントを通じてイギリス帝国の「統合」を強化しようとする、イギリス王室を中心とした、イギリス帝国支配層による意識的な作業の一環であり、そのハイライトだったと考えられる。例えば、一九〇八年のロンドン・オリンピックの運営に、イギリス王室は積極的に関わっていた。<sup>(8)</sup>一九一〇年には、ジョージ五世のウエストミンスター寺院での戴冠儀礼と、バッキンガム宮殿の正面に構築されたヴィクトリア・メモリアルの披露が、ほぼ連続して行われた（ヴィクトリア・メモリアルの披露には、ヴィクトリアの孫であるヴィルヘルム二

世も参加していた)。さらにジョージ五世は、イングランドに地理的に最も近く、インドと並んで不穏な雰囲気を漂わせる事実上の植民地アイルランドへと向かった。一九一一年に入ると、ロンドン近郊で「帝国祭」(Festival of Empire)が開かれ、王室はこれにも関与した。<sup>(9)</sup>

ジョージ五世は、一九〇三年ダーバーへの参加をカーゾンに阻まれた遺恨を晴らそうとするかのように、みずから主催するインペリアル・ダーバーを、一九〇三年のそれにもまして「成功」させようとした。カーゾンが立案したイヴェントのためのフォーマットを忠実になぞりながらも、新機軸を加え、また、インド人たちが所有するメディアからの反発を招かないよう、細心の注意を払おうとした。

例えば、インド社会が飢饉に苦しむ最中に行われた一八七七年ダーバー、飢饉の直後に行われた一九〇三年ダーバーとは異なり、ジョージ五世は、一九一一年の雨季が降雨不足で農作物が不作であったことを考慮し、あえてイヴェントの「華美さ」を抑えることによって、「新皇帝はインド社会への『配慮』を行う人物なのだ」との印象を醸し出そうとした。<sup>(10)</sup>

具体的には、一九〇三年の際に実施された、英領インド軍の演習とダーバーとの連動を行わなかった。英領インド軍の演習を行わなければ、大幅な経費の削減になることは明らかだったし、帝国の軍事力の露骨な誇示を控えることも、インド人所有のメディアに好ましい印象を与えるはずだ、との考慮が働いていたはずである。また、デリーへの入式式に際して、前二回のように、式典の主役である国王夫妻(前二回は、実際にはインド副王夫妻)が巨象に座乗し、パレードを率いることもしなかった。そのようになった理由は実は明確ではないのだ

が(象に座乗することを王妃メアリーが受け入れなかったからだ、との説明もなされている)、ジョージ五世としては、イヴェントが過度に華美なものとなることを自分は避けようとしている、との意向をアピールしたかったのだ、とも考えられる。

ただし、一九一一年ダーバーに際しての、インド人所有メディア(新聞)の論調は、一九〇三年ダーバーの際に比べると、当初から明らかに好意的ではあった。ジョージ五世自身がインドへやってきてイヴェントを主宰することが、インド社会全体の好奇心と興奮をかき立てたことが最も大きかった。また、所詮は副王に過ぎなかったカーゾンとは異なり、ジョージ五世は文字通り英領インド帝国の元首であったから、そうした人物が主宰するイヴェントを、それがいかに「時代遅れのページェント」であるとしてインド人新中間層には思われようと、王権への「敬讓」のメンタリテイから、正面から批判することにはためらいがあったであろう。さらに、一九一〇年十一月に着任した新インド副王ハーディングは、アスキス自由党内閣によって任命されたリベラルな元外交官であり、インド人新中間層からも一定の期待感をもって迎えられていた。<sup>(11)</sup>

いずれにしても、英領インド帝国という政治枠組を、ダーバーを通じてインド社会に再度売り込もうとするジョージ五世の戦略の中で最も重要であったのは、一九〇三年ダーバーのためにカーゾンが行った塩税引き下げの努力に倣い、インペリアル・ダーバーに際しての、インド社会一般への実質的な「恩恵」として、ベンガル分割の撤廃と、カルカッタからデリーへの遷都を発表するべく、それを秘密裏に準備していたことだった。一見したところ、ベンガル分割の撤廃は、英領

インド帝国という政治枠組の權威を傷つけるようにも見える。しかし、インドにおける最強の権力者であるはずの副王（カーゾン）が犯した「誤り」を是正することで、より「正しい」超越的な国王Ⅱ皇帝が存在し、彼はインド人臣民のために副王を叱責することもためらわないのだ、とのメッセージを、インド社会に発することが期待できた。さらに、国王Ⅱ皇帝自らがデリーに新都を造営すると発表することで、英領インド帝国の新たな時代が始まり、帝国は、よりインド社会に根づいたものになるだろうとの予感を、インド社会に生じさせることも期待されていた。

### 一九一一年ダーバーの全体像

ダーバー設営の責任者には、連合州の準総督ジョン・ヒューイット（インド高等文官）が任命されたが、実際に中心となってプロジェクトを取り仕切ったのは、インド政庁財務局で勤務していたウイリアム・ヘイリー（インド高等文官）だった。<sup>(12)</sup>ヘイリーは、彼がパンジャーブ州の県知事であった頃に、インド訪問中の皇太子（後のジョージ五世）と接触し、後者から高い評価を受けていた。ヘイリーは、カーゾンによって既に緻密に構成されていたダーバーの実施要領を、ほぼ完璧になぞってみせた。カーゾンのインド統治思想を彼が明確に理解し、それに共鳴していたため、そのようにすることが可能になった、と考えられる。<sup>(13)</sup>式典の次第は、ヘイリーが準備したとおりに、ほぼ円滑に運行された。しかし、一九一一年ダーバーに際してのインド社会側からの動きであり、いわば「民衆の祭典」だった「バードシャーヒ・メーラー」に関しては、ヘイリーは全く関わっていないかつ

た。

メディアへの対応や、その積極的な活用も、一九〇三年ダーバーのためにカーゾンが策定したフォーモットに沿って、効果的に行われた。とりわけ、一九〇三年ダーバーの視覚的豪奢さを目にし、それからまだ数年も経たないうちに、それが再現されることを告げられた視覚メディアの興奮は、否応なく高まっていた。カメラは、一九〇三年の折に比べて、職業的写真師たちの範囲を超えて、一般の在印イギリス人、富裕なインド人、海外からの観光客なども保有するようになっており、そうした人々が撮影した膨大な量の写真が、世界中へ流布することになった。映画撮影についても、撮影場所などの提供に関して、植民地当局側からの協力的姿勢は今回も顕著だった。写真と同様に、一九〇三年ダーバーに比べて格段に多くの動画イメージが作成され、イギリス本国、インド植民地、さらには広く世界各地の映画館で、ほとんど時を置かず、ニュース映像として上映されることになった。

特筆すべきなのは、一九一一年ダーバーについてはカラー映像が残されていることである。アメリカ人チャールズ・アーバンが経営し、イギリスを本拠地として活動していた映画撮影会社、キネマカラー社のスタッフが来印し、三時間を超える長尺のカラー・ドキュメンタリーを制作した。入市式、公式の式典、軍事パレードはもちろんなのと、先に触れた「民衆の祭典」まで含めて、文字通りインペリアル・ダーバーの全貌がカヴァーされており、その色彩の華やかさとあいまって、世界中の興行界でヒットを収めた。しかし現在、同作品の残存部分として確認されているのは、七分間ぶんほどである（軍事パレードの一部が撮影されている）。その残存部分は、旧ソヴィエト連

邦が保持していた映像アーカイヴのなかにあった。

第一次世界大戦直前の時期、イギリス王室とロシア王室の関係は緊密だった。ジョージ五世とニコライ二世は母方のいとこ同士であり、また、ジョージ五世とニコライ二世の妻は、ともにヴィクトリア女王の孫であって、やはりいとこ同士だった。従って、一九一一年ダーバーに関するアーバンのカラー作品は、イギリス王室によって「お買い上げ」となり、ロシア王室に贈与された、と想像される。ロシア王室の財産となっていたものが、ロシア革命後にソ連政府によって没収され、そのアーカイヴで、一部のみが何らかの目的から残されたのではないか（ソ連政府が、英領インド軍に関する軍事情報として用いようとしたのかもしれない）。アーバンの作品は、さらに、当時イギリスの重要な同盟国だった日本の皇室にも贈られた可能性がある。明治天皇は、インペリアル・ダーバーが行われて約半年後の一九一二年七月に死去した。従って、他界する前にダーバーのカラー映像を目にしていたかもしれない。そうであるとするれば、即位前後の大正天皇、十歳代のその息子（後の昭和天皇）も目にしていたはずである。

インペリアル・ダーバーという豪華極まりないイベントを通じて、地球規模でのツーリズムを促進しようとするイギリス王室の意図は、一九一一年ダーバーに際しても顕著だった。ジョージ五世は、デリーでの公式行事を終えた後、ネパールなど幾つかの藩王国を訪問し、虎狩りなどの狩猟を存分に楽しんだ。他方、王妃メアリーは夫とは別行動をとり、インド各地の観光スポットを訪ね、シヨッピングを楽しんでいる。両者のこうした動静も、様々なメディアを通じて報道された。既に触れたように、ジョージ五世は、一九〇三年ダーバーの際の

カーゾンのように象に座乗するのではなく、騎馬でデリーへの「公式入城」を行った。ジョージ五世以外の主要なイギリス人男性随員たちも騎馬であり、王妃「皇后をはじめとする女性たちは馬車でパレードに加わった。結果的に、沿道に詰めかけていたインド人民衆の目には、誰が国王「皇帝なのか区別がつかない、ということになった。権力者がその権力と富の象徴である巨象に座乗してパレードを行うことがインド社会で有する意味については、ジョージ五世も当然認識しており、彼はあえてそれを選ばなかったことになる。<sup>(14)</sup>

式典そのものは、比較的淡々と進んだ。一九〇三年ダーバーの際と同様に、一九一一年ダーバー式典においても、そのハイライトは、国王「皇帝夫妻に対する藩王たちからの敬意と忠誠の表明だった。しかし、藩王たちの中で序列二位であり、ハイデラバード藩王に続いて敬意と忠誠の表明を行ったバローダ藩王が、かなりくだけた身なりと所作でそれに臨み、あまつさえ退席に際して国王「皇帝夫妻に背中を見せたことが、数多くの映像で繰り返し写し出されることになった（国王「皇帝夫妻に顔を向けながら引き下गरなければならぬ、とのプロトコルが存在した）。挑戦的にも見えるバローダ藩王のこうした態度の真意が、ナシヨナリズムの文脈を意識しながら、英印のメディアで盛んに論じられた。バローダ藩王自身は、自分の前に敬意を表明したのがハイデラバード藩王一人だったため、どうしたらよいのかわからずに混乱していた、とインド政庁に弁明した。<sup>(15)</sup>

公式の式典がまさに終わろうとしていた時、そのクライマックスが、ほとんど突発的に始まった。式次第には示されていないにもかかわらず、ジョージ五世が観衆全体に向けてスピーチを始めたのだった。

その内容は、イギリス本国政府、インド政庁の双方において極めて限られた数の人々にしか知らされておらず、メディアに漏れることもなかった。そのため、ベンガル分割令を撤廃し、英領インド帝国の首都をカルカッタからデリーへ移すとの、国王Ⅱ皇帝本人からの発表は、非常な驚きをもって迎えられた。拡声器はまだ実用化されていなかったため、国王のスピーチの内容を直接聴きとり、理解できた者は多くなかった。観衆の間でさざ波が広がるようにその趣旨が伝わり、会場全体が非常な興奮に包まれることとなった。プレゼンテーションの仕方としては、劇的な成功を収めたと評するべきだろう。式典がすべて終了し、観衆のほとんどが立ち去った後、ベンガルからやってきたブラーフマンたちが、国王Ⅱ皇帝の玉座に近づき、敬虔さに満ちた態度で国王への感謝の祈りを捧げていた、と英語メディアが伝えている。

#### バードシャーヒ・メーラー

一九一一年ダーバーの特徴として最も注目すべきなのは、デリー居住民の一部（イギリス人、インド人双方より成る）からの自発的な動きを利用する形で、国王Ⅱ皇帝と一般民衆の「交歓」を演出することに成功し、また、一八七七年、一九〇三年ダーバーの状況をはるかに上回る規模で、インド各地で同日、同時刻に類似の式典が行われたことだった。

二週間をこえて、公式の式典と並行する形で、民衆が組織し、民衆が主役となり、民衆自身が享受する大規模な祝祭が、ラールキラ（ムガルル皇帝の旧居城）の東側にある、ジャムナ川の広大な河岸で行われた（ただし、その主要な局面では「官」側からの援助が顕著だっ

た）。このイヴェントは、「バードシャーヒ・メーラー」と称された。「バードシャー」は「皇帝」を意味し、また「メーラー」はサンスクリット語起源のヒンディー語で、祭りに関連して行われる宗教的な市を意味する。参集者の数は、最大時には数十万に達した。さらに、「民衆」の代表数万人が、メーラーの組織者たちによって選抜され、「官」側のイヴェント（ダーバー会場での式典）に観衆として送り込まれた。その上、結局、「官」側の行事日程の中にメーラーのハイライトが組み込まれることにすらなった。式典が行われた日の翌日の午前、インド社会を構成する様々な宗教共同体の指導者たちが、メーラー会場のあちこちにそれぞれの祭壇を設けた。そして、それらの祭壇を中心として民衆が集い、英領インド帝国と国王Ⅱ皇帝の繁栄を願う祈りをそれぞれの仕方で行った。午後には、かつてムガルル皇帝が民衆にその姿を観望させたラールキラの東側の城壁上に、国王Ⅱ皇帝夫妻が並び立つて姿を見せ、その面前を、数万人のインド人民衆が万歳を叫びながら行進した。さらにその数日後、国王Ⅱ皇帝は宗教指導者たちを民衆の代表として引見しさせた。以下では、こうしたメーラーにまつわる経緯を、もう少し詳しく見ていくことにする。

ジョージ五世自らがインドへ赴いてインペリアル・ダーバーを行うことが告知されると、デリー居住民の間で、このイヴェントにいわば「主体的」に関わろうとする姿勢が生じ、それが「バードシャーヒ・メーラー」という形で結実した、と考えられる。ただし、デリーおよびその周辺地域に住む人々が、自発的にメーラーを企画し、実行し、享受することによって一九一一年ダーバーに積極的に関与したことは、デリーという都城が抱えていた、イギリス人たちとの間での深刻な経

緯（インド大反乱時には、主戦場の一つだった）を考えれば、やや奇異な印象も受ける。しかし、一八七七年ダーバーと一九〇三年ダーバーを身近で目撃したことを通じて、イギリス側の統治姿勢が変化しつつあること（ムガル帝国のありようへの回帰）は、デリーの住民も感じていたであろう。また、一八七七年、一九〇三年の際とは異なり、今回のダーバーでは国王Ⅱ皇帝自身がイヴェントを主催するという事実が、人々のイマジネーションをかき立てた、とも考えられる。デリー居住民のほぼすべてが、一九〇三年ダーバーを目撃ないし体験していたが、その際の彼らの立場は、イヴェントのオーディエンスに過ぎなかった。次回、そうした機会が生じた時、自分たちはどのような形でそれに関わることができるのか、といった思考が、彼らの間でも潜在的に行われていた、と考えられる。ダーバーは、被統治者も、彼らなりの仕方でも統治に関する一定の意思表示を行うことのできる機会だ、との意識も存在したはずである。デリーの住民たちは、数百年にわたってインド歴代王朝の首都で演じられてきた政治劇の目撃者であったし、ある意味ではその参加者でもあった。<sup>(16)</sup> 彼らのそうした記憶が、一九〇三年ダーバーによって呼びさまされたのかもしれない。また、ベンガル分割反対運動以降、インド各地の「民衆」が街頭で政治的意思表示を行い始めた、との報道も、デリー居住民に影響したと考えられる。そして、「民」側のこうした動きの意味に関して、ジョージ五世は敏感だった。

公的イヴェントとしてのダーバー式典では、国王Ⅱ皇帝が、英領インド帝国において権力的地位にある者たちすべてを招集して儀礼を挙行し、その儀礼の中で、権力的地位にある者たちが国王Ⅱ皇帝に対し

て忠誠を誓い、民衆がオーディエンスとしてそれを見つめる、という構造だった。これに対してバードシャーヒ・メーラーでは、民衆自身が儀礼を催行し、国王Ⅱ皇帝をいわばゲストとして招いた上で、彼に忠誠を誓い、両者が交歓する、という構造だったわけである。

ただし、バードシャーヒ・メーラーのアイディアを最初に言い出したのは、イギリス側の権力者（インド高等文官である、パンジャープ州準総督サー・ルイス・デイン）だった。また、民衆の誘致、イヴェント自体の運営に関しても、イギリス統治権力側が陰に日向に援助していた。従って、イギリス統治権力は、一九一一年ダーバーを催行するのにあたって、イヴェント全体へのインド人民衆の関心を高め、また、それに何らかの形で自らも関わりたいとの、一定の自発性を生じさせるほどの、巧妙な文化政策を展開した、と考えるべきなのかもしれない。メーラーの準備が進み、それがかなりの規模となることが明らかになった時、「ダルシャン」を行うことについての要請が、バードシャーヒ・メーラーの主催者側からジョージ五世に対してなされ、その意味を察知したジョージ五世が要請を受け入れた、と考えられる。いずれにしても、デリー・ダーバーに際してメーラーを実施する方向へと誘導したイギリス権力側の方策は、ジョセフ・S・ナイが言うところの、「効果的な広報外交」のありように近いものだった、と思われる。<sup>(17)</sup>

メーラーに際して行われた国王Ⅱ皇帝と民衆の交歓は、インド社会で行われてきた「ダルシャン」の再演だった。ダルシャンは、本来は宗教上の概念であり、信徒たちが神の姿を目にしたいと思ひ、逆に、自らが神の視界に入ることも望む、という状態を意味する。ムガル

帝国のアクバル大帝が、ダルシャン概念の政治的な利用を洗練し、定式化した、と考えられている。アクバルは自らを「神」とする宗教の樹立を考えていた。ダルシャンの観念を自分と臣民との関係にあてはめて利用することは、彼の企図にうってつけだった。アクバルは、自らの居城の居住用建物に設けられた「ジャロカ」(豪華な装飾を施した出窓)に定時に姿を現わし、眼下に集まった民衆と交歓する、という慣行を定着させた。政治的には、国王が健在であり、臣民たちのことを国王が気遣っていることを示し、臣民たちに安心感を与える機能を果たした。宗教的には、アクバルの「神性」の恩恵に浴させることで、臣民たちに満足感を与える、という機能を果たしたはずである。<sup>(18)</sup>

アクバル以降も、ムガルル皇帝たちは一定の時間にジャロカに現われ、一般民衆にその姿を觀望させる(ダルシャンを与える)という慣行を続けていた。ジョージ五世は、半世紀ほど前までデリーの住民が参与して行われていた、こうした儀礼の存在を知り、また、ダーバーに際して民衆がメーラーを行おうとしている会場こそが、そのような慣行が行われていた場所であったことを認識する。かくして彼は、メーラーという願ってもない舞台装置を利用して「皇帝のダルシャン」を復活させ、イギリス統治権力とインド人一般民衆のインターフェイスを広げようと考えるに至った。<sup>(19)</sup>

メーラーのアイデアを最初に言い出したのはサー・ルイス・デインだったが、そのアイデアを知って名乗りを上げたのが、デリーの灌漑局で勤務していたイギリス人工兵将校、G・E・ソップウイス中尉だった。デインの名前で一九一一年四月二十七日に起草され、ラージプターナ地方、パンジャープ州、連合州の要人たちに宛てて出され

た書簡において、メーラーについてのアイデアの大枠が示され、委員会が構成されることになった。しかし同書簡は、実はソップウイスが書いたもの、と思われる。すなわち、既にこの時点でプロジェクトのリーダーシップはソップウイスに移っていた。そしてソップウイスがバードシャーヒ・メーラー委員会の事務長になり、メーラーを具体化させていった(デインは委員長に納まった)。

数名の人物が、ソップウイスを中心として事務局を構成し、メーラーの準備と催行を担うことになった。彼らは植民地政庁で勤務していたり、それとの関係が深い職業に従事したりしていたが、メーラーの準備とその催行に関しては、私人としての立場で、あくまでヴォラティアとして活動した。イギリス人、インド人双方からなり、いずれもデリーないしその近郊に居住していた。<sup>(20)</sup>

メーラーの準備過程について詳しく記した文書を、ソップウイスが残している。以下、その中で重要と思われるポイントを紹介する。

・「一九一一年の早い段階で、パンジャープ州準総督が次のような提案を行った。すなわち、このユニークな機会に、宗教指導者たちと民衆一般に、これまでに比べて、より密接な形でコロネイションにまつわる祝祭に関わるチャンスが与えられてよいのではないかと、そこで彼は、一九一一年十二月にデリーで行われるコロネイション・ダーバーと結びつける形で、バードシャーヒ・メーラー、すなわち民衆の祝祭を行う、という考えを提起した。」

・「バードシャーヒ・メーラーを行う主旨は、遠隔地に住む、より恵まれない人々に両陛下の姿を目にする機会を与えることであり、こうした目的のためには、彼ら「民衆」の到着を、ダーバー式典が行

われる十二月十二日の前にすることが望ましかった。訪問者たちがダーバー式典の幾らかを目にし、十二月十三日の午後には全員がメーラー会場にいられるようにするために、である。十三日には、両陛下が、城砦のサムマン・ブルジの歴史的なジャロカから『ダルシャン』を、その直下のペラに集まる人々に与えることに同意してくださった。かくして、ムガール時代の、古来の皇帝の習慣を復活することになる。」

・「コロネイション・ダーバー委員会にアプローチしたところ、親切にも彼らは、ダーバー式典会場のスペクテイターズ・マウンド「観覧のために設けられた小山」に、メーラーへの訪問者たち一万人のための場所を割り当てること、さらに、行列ルートに沿った場所も彼らに割り当てることに、同意してくれた。」

・「諸県と諸藩王国は、それぞれが約二百人の特別代表を選ぶことを求められた。代表者たちには、ダーバー式典に際してスペクテイターズ・マウンドに入るためのチケットが与えられた。また、彼らは、ダルシャンの間、「両陛下の面前を進む行列の先頭を歩くことになっていった。」

・「特別代表たちが、彼らの出身の県あるいは藩王国の典型的な存在であるように、可能な限りザミンダリー「地主」であるか、富裕な商業階級であってほしい、と要請された。」

メーラー委員会は、メーラー催行のためにかなりの支出をせねばならず、そのための資金の手当てが必要だった。結果的に、藩王や大地主たちからの醸金に頼ることになった。<sup>(22)</sup>メーラーを実施する過程では、様々な営業収入もあったが、結局、赤字になった。インド政庁は、

メーラーに関して、その準備過程では全く資金援助をしなかったが、最終的に生じた赤字は穴埋めをした。<sup>(23)</sup>

ムガール時代の経緯から、当初からメーラー会場は「ペラ」とすることが想定されていた。そこは、ムガール時代において皇帝たちが軍隊を閲兵し、象たちのレスリングを見物するのを楽しみ、そして何よりも、ダルシャンを与えることで民衆と交歓した場所だった。しかし、ムガール帝国滅亡後はそのような機会とはやなく、荒地地になっていた。「ペラ」は大河近くの沼沢地であったため、メーラーの会場として利用するためには、まず灌漑工事を施す必要があった。灌漑局で勤務するソップウイスが、メーラーのアイディアを早い段階で知ったのも、こうした事情が背景にあったからだった、と考えられる。<sup>(24)</sup>

委員会事務局には、広報のための部門も設けられた。ポスターを用意して英領インド帝国全域へ送付し、デリー市内ではピラが配布された。<sup>(25)</sup>

メーラーは、あくまで「民」の主導するイヴェントのはずだったが、その準備・運営に関して、「官」からの援助が積極的に行われた。ただし、そうした援助は、「官」側の個人がヴォランタリーに行っている、との建前が維持された。会場の土木上の準備に関しても、民間の力だけで限られた時間内に行うのは困難だ、と見なされたものについてだけ、英領インド軍の工兵部隊が動員された。<sup>(26)</sup>会場の衛生面の管理に関しては、インディアン・メデイカル・サーヴィスのメンバーが助言を行った。<sup>(27)</sup>しかし準備の最終段階で、委員会事務局の力だけでは意図したとおりの規模でメーラーを催行することが困難になっている、との認識が広まった。結局、委員長であるパンジャール州準総督デイ

ンにソップウイスが助力を求め、「官」側が組織だつてイヴェントの運営を支えることになった。<sup>(28)</sup>メーラーのハイライトであるダルシヤン行列の運行にも、警察および軍からの「協力」が顕著だつた。<sup>(29)</sup>

二週間以上にわたり、民衆が主役となり、民衆が享受する祝祭が大々的に行われた。しかし、統治権力側による動員と統制の色彩も濃厚だつた。以下、報告書の中で触れられている主要な事実を紹介する。メーラー会場に集まった民衆の数には、期間を通じてかなりの変動が見られた。最大の三十万〜五十万人に達したのは、ダルシヤンが行われた十二月十三日だつた。

・集まった民衆のため、様々なアトラクション(スポーツ、エンターテインメント、パフォーマンズ、打ち上げ花火など)が提供された。会場には、六万人を収容可能な「アリーナ」、同じく六万人を収容可能な「サーカス・ブロック」、八万人を収容可能な「スペクテイターズ・ブロック」が用意され、アトラクションのために利用された。スポーツとしては、以下のようなものが行われた。「(1) レスリング、(2) ドダ、(3) カバディ、(4) サウンチ、(5) ガトカ・ファリ、(6) ラム・ファイティング、(7) 凧揚げ、(8) 綱引き、(9) 鳩飛ばし」。エンターテインメントとしては、以下のようなのが行われた。「音楽、手品、アクロバット、ダウンガ・ダンスとケトラ・ダンス、ヒル・ダンス、カタック・ダンス、サイドショー、花火、国王下賜の砂糖菓子配布、ラナガルカナ、詩」。アトラクションの運営を担当する部門が委員会事務局の中に設けられ、競技者・演者たちを招致し、競技会を組織し、優秀な成績を収めた者には賞品を与えるなどした。<sup>(30)</sup>打ち上げ花火に関しては、実施の数

日前に死傷事故が起こり、花火の半分が失われたが、十三日夜に「スペクテイターズ・ブロック」で行われた花火大会そのものは「大成功」だつた。<sup>(31)</sup>会場では、夜間、救世軍の協力で映画の上映も行われた。<sup>(32)</sup>

・インド社会で行われる通常のメーラーに倣い、バードシヤーヒ・メーラーでもバザールが開かれることになった。しかし、デリー市の商人たちがメーラー会場に出店することに消極的だつたため、委員会は他の地域の商人たちに呼びかけ、バザールを設営させた。バザールは集客に成功し、主要なアトラクションの一つとなつた。<sup>(33)</sup>

・「官」側のイヴェントのハイライトであるダーバー式典が行われた日の翌日(十三日)、「民」側のメーラーがハイライトを迎えた。午前には、民衆を主役とする宗教的儀礼と行進、午後には、遠隔地から集められた「代表」を含む民衆の行進と、国王Ⅱ皇帝と民衆の交歓(ダルシヤン)が行われることになつていった。同日午前、インド社会の様々な宗教の指導者や信徒たちが、メーラー会場周辺の幾つかの地点に、それぞれの宗教別に集まり、皇帝夫妻のための祈りを捧げた。その後、それぞれの信者たちが行列を形成し、かつて、ムガル皇帝がその姿を臣民に観望させたジャロカの方向を目指して行進を始めた。ジャロカの直下で、パンジャーブ州準総督デインなど、英領インド帝国の統治エリートたちが彼らを出迎えた。ついで、すべての宗教集団が一緒になつて、再度、皇帝夫妻のために祈りを捧げた。同日午後、ジョージ五世と皇妃がジャロカに姿を現した。二人は間もなく城壁上の一角に移動して着席し、その面前を、諸県・諸藩王国の代表者たちによって先導された、数万人の民衆が

「皇帝万歳」を叫びながら行進するのを見つめた<sup>(34)</sup>。さらにその三日後（十六日）、ジョージ五世は宗教指導者たちを自らの大テントに招き、引見を行った。国王Ⅱ皇帝と、インド社会の主だった宗教指導者たちの公式な接触はこれが初めてであり、その後、こうした経路が維持されることになった。<sup>(35)</sup>

一九一一年ダーバーが行われてから九カ月後、メーラーがもたらした「顕著な効果」について記した文書を、パンジャール州政府が作成していた。メーラーの実施を提案したのが同政府のトップであったから、その評価を額面通りに受け取ることはできないのかもしれない。しかし同政府が、メーラーの成功の最大のポイントは人々の「自発性」を引き出した点だった、と考えていたことは注目してよいだろう。「バードシャーヒ・メーラーの大きな特徴は、その自発性だった。それは実際上、公共の利益のために無償で働くヴォランティアたちによってアレンジされた。…皇帝のダルシャンとメーラーの大成功は、まさしくこの自発性の賜物だった。これらの儀式を撮影した映画が、ヨーロッパであれほどの高い人気を得たのは、おそらくそこに、人々の喜びと楽しみが明瞭に写し取られていたからだだった。人々の喜びと楽しみが純粹で偽りのないものであり、メーラーの記憶が持続的な効果を保っていることは、多くの点で「パンジャール州」準総督によっても感じられている。デリーを立ち去った後、宗教指導者たちは、多くの人々が署名したあいさつの書簡を準総督に宛てて送り、両陛下のために、彼らの信仰のルールに則って祈り、祝福する機会を政府が準備してくれたことについて、感謝した。諸県と諸藩王国の代表者たち

は、国王Ⅱ皇帝と王妃Ⅱ皇后の優雅な姿を表現することに、いまだに飽きることがなく、また、彼らが目にした驚嘆すべき光景について語り続けることにも、決して飽きていない。すべての人が懸命に努力し、最善の振る舞いをした。イヴェント全体を通じて、花火工場で事故が一度あっただけであり、死者は二人だけ、伝染病も発生しなかった。<sup>(36)</sup>

興味深いことに、インド社会の民衆層でのインペリアル・ダーバーへの関心の高まりと、「官」側の儀礼に民衆が自発的に呼応しようとする動きは、デリーでだけ生じたわけではなかった。一八七七年、一九〇三年ダーバーの例に倣い、ダーバー式典が行われたのと同じ・同時に、諸藩王国を含む英領インド帝国のすべての行政中心地で、ミニチュア版の公的なイヴェントが行われていた。<sup>(37)</sup> インド政府から各州政府に宛てて、それをどのように行うべきかについて、大まかなガイドラインを記した通達があらかじめ配布されていた。しかし、イギリス人官僚、インド人官僚たちが各地のイヴェントに関して作成した報告書の中では、こうしたイヴェントへのインド民衆の関わり方の「自発性」について、驚きを表明するものが多かった。一九〇三年ダーバーの華やかなありように関する情報が、メディアを通じて既に広くインド社会に伝わっていたため、それをモデルとして類似のイヴェントを行うことが可能となり、そのような機会が再び訪れれば、今度は自分たちも主体的に関わりたい、との意欲が、やはりインド各地の民衆層でも生じていた、と考えられる。

インド全土の村落レヴエルで、イギリス国王夫妻の肖像画（肖像写真）を掲げての行列が行われた。マドラス市での状況は、次のようなものだった。「祝祭の民衆的な部分は終日行われ、以下のようなイ

ヴェントを含んでいた。(1) 貧民への食事と衣料の提供、(2) 学童への菓子の配布、(3) ページェントの行列、(4) 民衆の祝祭、(5) イルミネーション。夜には、町全体がライトアップされた。」連合州の県・村落レベルでの儀式は「本質的にインド的」であり、それは民衆の「自発性」に基づいてイヴェントが行われたからだった、との解釈が示されている。「こうした自発性の要素が、これまで述べてきた儀式の本質的にインド的な性格を、おそらく部分的に説明している。県のヘッドクォーター「行政区域」で行われた儀式でさえ、そのようだった。」「文字を読むことのできる人物が一人でもいるような、ほとんどすべての村落において、国王Ⅱ皇帝の宣言が読み上げられた。」

これらの報告書は、さらに、インド政庁からロンドンのインド省へと転送された。ハーディング以下、副王参事会のメンバー全員が署名し、インド担当大臣クルー侯爵に宛てて送付された書簡が添付されており、報告書全体についての紹介文になっている。「インド全土を通じて、この機会「ダーバー」が例外的な重要性を持つものだと見なされてきたこと、また、両陛下のインド訪問とデリーでの儀式が、民衆の想像力を深く刺激したことについては、疑う余地がない。それと同時に、各地方での祝祭は最も有益な効果をもたらし、国王Ⅱ皇帝個人と王座への忠誠心と献身という絆において、インド社会の様々な階級をより密接に結び付ける傾向を示している。」

報告書を受け取ったインド省側では、ダーバーが大成功を収め、英領インド帝国にとつての新たな展望を開くことにも貢献した、との思いが広がっていった。同報告書の冒頭に、インド省官僚が書いた覚書が添付されている(署名はない)。「これは、英領インドおよび諸藩王

国を通じてダーバー・デイが祝われた際の、満場一致ぶりと熱心さについての、印象的な記録である。様々な報告書の中で、祝祭の成功を確実にするために現地人たちが自発的に努力したこと、どのようなイヴェントが行われたのかについて、イギリス人官僚が事後に確認に来るとは予想されないような遠隔の地においてさえ、祝祭に対して強い関心が示されたことについて、特別の注意が向けられている。」「イギリスへ戻った後、ジョージ五世自身も、こうした報告書を集めたファイルに目を通し、強い関心を示したことがわかっている。

#### まとめに代えて

あるインド人のカルチュラル・スタディーズ研究者の表現に従えば、現代インド社会では、いわゆる市民社会で行われてきた政治取引のありようとは異なる、ポピュリスム的な政治取引の形態が定着しつつある<sup>(38)</sup>。そうしたインド社会の政治スタイルは、様々な経緯と経路を通じて形成されたと考えられるが、その主要な側面の一つは、植民地時代において市民社会的政治空間(立法参事会において、植民地政府とナシヨナリストたちの綱引きが行われた)とは別の場所を探られ、鍛えられたものだったはずである<sup>(39)</sup>。

既に見てきたように、十九世紀末以降のインド社会では、植民地支配者側の一定部分(イギリス王室と、それに近い立場の人々)が、植民地の民衆層との交信を積極的に図ろうとし始めていた。インペリアル・ダーバーというイヴェントは、イギリス君主制を主人公とする政治儀礼を通じて、「帝国のメリット」を広くインド社会に「売り込む」ことを意図して実施された、大規模な文化政策でもあった。しかし、

一九〇三年ダーバーの場合と同様に、一九一一年ダーバーの場合も、イギリス側は、そうしたイヴェントの後に犯した「失策」によって、ダーバーを通じて培ったはずのインド社会に対するソフト・パワーを結局失う、ないしは大きく毀損することになる。すなわち、一九一四年から始まった第一次世界大戦に勝利を収める上で、イギリスは、植民地インドからの多大な貢献に依存していながら、インド社会からの切実な要求である、インドへの自治権の付与という課題に関して、インド社会の目から見れば「けち臭い」対応しかしようせず、強い反発を生じさせることになったから、である。逆に、インペリアル・ダーバー的なイギリス側の文化政策の展開に対抗しようとする勢力が、第一次世界大戦末期、ガンディーという民衆的カリスマに率いられる形で、インド社会に登場した。かくして、インド民衆からの支持をめぐって、インペリアル・ダーバー的な君主主義と、ガンディー的なポピュリズムの間の競争が、市民社会的政治空間での綱引きを差し置いた形で展開され、インド社会に特有の政治スタイルを育むことになった、と考えられる。<sup>(40)</sup>

しかし、イギリス王室がインドにおいて学んだ、インペリアル・ダーバー的活動を通じてのイギリス国家のためのソフト・パワーの構築、という手法は、インドおよびアイルランドを重要な例外として、イギリス帝国の多くの地域、友好国では、その後も有効であり続けた（あり続けている）。第一次世界大戦後のイギリス王室は、ヨーロッパの諸帝国の崩壊、ロシア革命の成功を目撃して衝撃を受け、またイギリス国内では、急激な民主化の進展に直面し、自らを「変化」させることを決意した。すなわち、イギリス国家、イギリス帝国のための文

化機関としての自らの性格をより強めることに、活路を求めることになった。

イギリス政府の側も、第一次世界大戦後は、他の社会に対するイギリス国家のソフト・パワーを涵養するために、より意識的で、積極的な広報外交を行うようになっていった。それは、第一次世界大戦中にアメリカへのはたらきかけなどをめぐって、ドイツとのプロバガンダ競争を行ったことから学習した成果でもあった。イギリス国家にとり中核的な広報外交機関となっていくBBCおよびブリティッシュ・カウンシルが、両大戦間期には誕生している。

そして、イギリス国家、イギリス帝国のための文化機関としての性格を強めたイギリス君主制は、こうした新たな国家的機関との間で、効果的な協働関係を築いていった。BBCは一九二七年にジョージ五世から「ロイヤル・チャーター」（独占的な機関として活動するための特許状）を与えられ、国王から国民（帝国臣民）へ向けてのクリスマス・メッセージの放送を定例化させた。<sup>(41)</sup>ブリティッシュ・カウンシルも一九四〇年にジョージ六世から「ロイヤル・チャーター」を与えられた。とりわけ第二次世界大戦後は、イギリス国家が他の社会に対して及ぼしうるソフト・パワーを涵養するための機関として、BBC、ブリティッシュ・カウンシル、そして王室が三位一体のように機能してきた、と考えられる。

それでは、本稿で論じてきた、デリー・ダーバーという帝国主義時代の文化政策は、こんにち、イギリス国家がインド社会に対して保持するソフト・パワーとの間で、なお何らかの関連性を持っているのだろうか。おりしも、二〇一一年は、一九一一年デリー・ダーバーから

百周年にあたっていた。インド社会がどのように受け止めたのかを確認したい。<sup>(42)</sup>

実際に一九一一年ダーバールの百周年が近づいてくると、インドの中央政府は、デリー・ダーバーというイヴェント自体は「コロニアル」（植民地主義的）なものだった、との理由から、その記念事業は行わないことを決定した。他方、デリー遷都百周年の記念に関しては、デリー州政府にまかせる、との方針が採られた。三度のダーバー式典が行われた場所は、「コロネイション・メモリアル」という名の公園になっていたが、ほぼ放置された状態が長く続いたため、それを改修すべきだ、との意見が出された。デリー州政府による改修費用の負担が州議会で承認され、工事が始まった。「デリー・ダーバー」というイヴェントを説明するための施設」も設けられることになった。この時点では、百周年当日の二〇一一年十二月十二日に、同公園において何らかの形で記念式典を行うことが想定されていた。

しかし、植民地支配時代の政治儀礼を追想する式典を、まさしくそれが行われた場所で行うのは不見識であり、仮に行うとしても、ラールキラで行われるべきだ、との世論が強まった。公園での改修工事が遅れていたこともあり、結局、十二月十二日前後には、お茶を濁すかのように、小規模なフード・フェアがコンノート・プレイス（ニュー・デリー中心部の繁華街）で催されただけだった。デリー・ダーバー百周年への関心が二〇一一年中にさほど高まらなかった背景としては、ガンディー主義者アナ・ハザリーの指導する、公職者の汚職追及運動がデリー市民の多くの関心を集めていた、という事情もあつたと考えられる。

デリー・ダーバーを記念するイヴェントは、むしろ二〇一二年に入ってから本格化した。インド政府は、二〇一一年という年を、あえて「やり過ぎした」のかもしれない。二〇一一年ではなく、二〇一二年をデリー・ダーバーに関わるイヴェントの年とする名目が元来あつたから、である。カルカッタからデリーへの遷都は、確かに一九一一年ダーバー式典でジョージ五世によって発表された<sup>(43)</sup>。しかし、副王ハーディングの率いる英領インド帝国政府が実際にデリーに移動してきたのは、一九一二年に入ってからだった。しかも、その遷都式のパレードにおいて、副王ハーディングが暗殺未遂に遭うことになった<sup>(44)</sup>。

他方、二〇一一年のロンドンでは、ウィリアム王子とケイト・ミドルトンの結婚儀礼が行われていた。同イヴェントへの関心はインド社会でも高かったが、インド社会では、実は、イギリス王室そのものへの強い関心が、独立後も持続してきていた<sup>(45)</sup>。こうした事態に関して、オックスフォード大学のマリア・ミズラが興味深い指摘を行っている。すなわち、インド社会では「ブリテイッシュ・ラージ」（イギリスによるインド支配）への積極的な評価が高まり、ミズラがその著述を刊行した時点での国民会議派政権において、そうした傾向が特に顕著だった。伏線は既に長くあつた。ジャワハルラル・ネルーは、ラージが残した慣習、シンボリズム、インフラに対して、暗々裏にシンパセティック（共感的）であり、彼の孫であるラジヴ・ガンディー首相は、さらに露骨にそのようだった。自分たちはアングロアメリカ的ニュアンスでグローバル化しつつある世界において「勝ち組」の側にあるのだ、との、当時のインド社会のエリート層の一部の認識が背景に

あった。<sup>(46)</sup>しかし、二〇一四年に実施された総選挙でインド人民党が勝利を取めたことにより、ヒンドゥー主義者であるナレンドラ・モディが第十八代のインド共和国首相となって後は、明らかにインド社会の文化状況は、帝國的なものへのノスタルジーから、国民国家としてのありようの純化を目指す方向へと、再び転じている。<sup>(47)</sup>

## 註

- (1) ただし、一九二〇年の段階でも、イギリス社会で「リベラル派の知識人」と目される人物であっても、ベンガル分割反対闘争の「真因」を次のように理解していた。「(こうした)アジテーションの多くが見せかけのものであったことは疑えない。その多くが、カルカッタの弁護士たちに由来していた。彼らは、近い将来「東ベンガルの」ダッカに高等法院が設置されることを見越し、それがカルカッタの高等法院から案件を持ち去ることにする」と考えていた。」  
W. L. & J. E. Courtney, *Pillars of Empire: Studies & Impressions* (London: Jarrolds, 1920), p. 305.
- (2) 君塚直隆『ジョージ五世——大衆民主政治時代の君主』日経ブレミアシリーズ、二〇一一年。Kenneth Rose, *King George V* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1983); Andrew Roberts, *The House of Windsor* (Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press, 2000).
- (3) インド副王カーゾンが、一九〇三年のデリー・ダーバーに「おまうとしていた意図に関しては、以下を参照。David Cannadine, *Aspects of Aristocracy* (London: Penguin Books, 1995), pp. 77-108. 本田毅彦「一九〇三年インペリアル・ダーバーにカーゾンが託した夢」『帝京史学』三〇号、二〇一五年、四五五—五二二頁。
- (4) 一九一一年ダーバーに際しては、一九〇三年ダーバーの時以上に大規模な出版ブームが生じた。Anon., *The King Emperor and His Dominions: Souvenir of the Coronation Durbar of H. I. M. George V, Delhi, December 1911* (New York: Burroughs Welcome, 1911?); M. E. Fitch, *Happy Holidays in India* (Pasadena, Cal.: The News Printing Company, 1911); Government of India, *Coronation Durbar Delhi 1911: Official Directory with Maps* (Calcutta: Calcutta Government Printing Office, 1911); J. Renton-Denning, *Delhi: the imperial city* (Bombay: ?, 1911); The Times, *India and the Durbar: a reprint of the Indian articles in the "Empire Day" edition of the Times, May 24th, 1911* (London: Macmillan, 1911); Anon., *Supplement to Who's Who in India: Containing lives and photographs of the recipients of honours on the 12th December, 1911, together with an illustrated account of the visit of their imperial majesties the king-emperor and queen-empress to India and the coronation durbar* (Lucknow: Newal Kisor, 1912); John Finnemore, *Delhi and the durbar; with twelve full-page illustrations in colour by Mortimer Menpes* (London: A. and C. Black, 1912); John Fortesque, *Narrative of the visit to India of their majesties, King George V. and Queen Mary: and of the coronation durbar held at Delhi, 12th December, 1911* (London: Macmillan, 1912); Archaeological Survey of India, *Loan exhibition of antiquities, Coronation Durbar, 1911: an illustrated section of the principal exhibits* (Delhi?: Archaeological Survey of India, 1913?); Courtenay Ilbert, *The Coronation Durbar and Its Consequences: A second supplementary chapter to The Government of India* (Oxford: The Clarendon Press, 1913).
- (5) Francis Robinson, 'The Indian National Congress', *History Today*, October 1982, p. 33.
- (6) ニールス・ノーマーガンン(仙名純訳)『フネーの進化史』早川書房、二〇〇九年、四〇一、四四七—四四九頁。
- (7) Sean McMeekin, *The Berlin-Baghdad Express: The Ottoman Empire and Germany's bid for world power, 1898-1918* (London: Allen Lane, 2011), pp. 85-100; Ian F. W. Beckett, 'Turkey's Momentous Moment', *History Today*, June 2013, pp. 47-53.

- (8) David Runciman, 'Political Games', *History Today*, June 2012, pp. 38-45.
- (9) Jan Piggott, 'Reflections of Empire', *History Today*, April 2011, pp. 32-39.
- (10) 脇村孝平『飢饉・疫病・植民地統治——開発の中の英領インド』名古屋大学出版会、二〇〇二年、一五八—一九七頁。同「インド—九世紀後半の飢饉と植民地政府の対応——一八八〇年飢饉委員会報告書を中心として」『社会経済史学』五〇巻二号、一九八四年、一八五—二〇三頁を参照。
- (11) この時点で、モティラル・ネルー(ガンディーの主要な支持者の一人としてインド・ナショナリズム運動を牽引した人物であり、ジャワハルラル・ネルーの父親でもある)は弁護士としてのキャリアを経て、連合州立法参事会のメンバーになっていた。彼と彼の妻にもインベリアル・ダーバーへの招待状が届き、彼らは娘二人を連れて、連合州総督の座乗する列車でデリーへと赴いた。モティラルの用意した礼服は、ケンブリッジ大学に留学中のジャワハルラルがロンドンで父のために誂えたものだった。Judith M. Brown, *Nehru: A Political Life* (New Haven and London: Yale University Press, 2003), pp. 43-44.
- (12) John Cell. W. Hailey: *A Study in British Imperialism, 1872-1969* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), pp. 32-72.
- (13) Anon. [William Hailey], 'The Coronation Delhi Durbar and Its Political Importance', *Asiatic Quarterly Review*, April, 1903.
- (14) 国王Ⅱ皇帝が公式入城を行う姿を目にしたインド人民衆の反応を、イギリス人警察官が次のように記録している。「街路に沿ってインド人民衆が詰めかけており、「国王Ⅱ皇帝が通り過ぎるのを見て」あちこちで喝采や拍手が沸き起こった。しかし大半の反応は、声高に『おー』という声を揚げたり、畏怖と敬意の視線を送ったりするだけだった。インド人たちは、過度に熱狂的ではなかった。彼らは「熱狂的であるよりは」畏怖していた。私は彼らの多くが「バードシャー、バードシャー」と口にするのを耳にすることができた。」
- ただし、デリー滞在が日を重ねるのに連れて、インド人民衆の国王Ⅱ皇帝に対する姿勢は好意的なものになっていった。同じイギリス人警察官が、ダーバーの余興として行われたポロやサッカーの試合を国王Ⅱ皇帝が見物した際のインド人民衆の反応を、次のように記している。ポロの会場で、「国王は大歓迎された。彼は、外出を重ねる度に、より歓迎されるようになっていく。インド人たちは畏怖の念を解消しつつあり、自発的に歓呼の声を揚げ始めている。以前は歓呼を先導するのは、いつもイギリス人兵士たちだった。」隣接するグラウンドでは、サッカーが行われており、国王はそちらも観ようと移動し始めた。：「サッカー会場でも」インド人民衆からの熱狂的な歓迎を受けた。再びポロ会場の大観覧席へ戻ろうとしてポロのグラウンドを横切った時には、数千人のインド人たちが彼の後を追い、彼を取り囲んで、これまで聞いたこともないような歓呼の声を揚げ続けた。」Coronation Durbar 1911, Papers of Sir Philip Crawford Vicker, MSS Eur D 1004/1, India Office Private Papers, British Library. (以下、India Office Private Papers, British Libraryを「IOPP, BL」と略記する。)
- (15) Charles W. Nuckolls, 'The Durbar Incident', *Modern Asian Studies*, 24-3, 1990, pp. 529-559.
- (16) Francesca Galloway, *Global India: Court Trade and Influence 1300-1900* (London: Francesca Galloway, 2009), pp. 88-93.
- (17) 「効果的な広報外交は双方向のものであり、話すとともに聞くことも重要である。ソフト・パワーは何らかの価値観に基づくものだから、交流の方が一方の放送よりも効果が高いことが多い。ソフト・パワーはそもそも、自分が望む結果を他人が望むようにすることであり、そのためには自分のメッセージがどのように受け止められるかを理解し、それに従ってメッセージを微調整していく必要がある。標的の聴衆を理解することが決定的に重要なのだ。」ジョセフ・S・ナイ(山岡洋一訳)『ソフト・パワー——21世紀国際政治を制する見えざる力』日本経済新聞社、二〇〇四年、一六九—一八四頁。

- (18) ムガール皇帝たちは、週に三回、あるいは、少なくとも十五日に一回はダルシヤンを行うことを慣例にしている。 Valerie Beinstraïn (translated by Paul G. Bahn), *Mughal India: Splendours of the Peacock Throne* (London: Thames and Hudson, 1998), p. 105.
- (19) ムガール皇帝の民衆へのインターフェェエンスのありかたを、イギリス国王エドワード皇帝が模倣しようとしたことは、第二次世界大戦直後の日本社会において連合国軍最高司令官マッカーサーが、「同時代のハリウッド映画でターリー・ターパーが演じていたのに似た家父長的男性性を、戦中期までの大元帥としての『天皇』の幻象と重ねながら、アイデンティティ喪失の虚脱感のなかに佇んでいた日本人の文化的想像力の劇場で演じた」ことを想起させる。吉見俊哉『冷戦体制と『アメリカ』の消費——大衆文化における『戦後』の地政学——』『岩波講座 近代日本の文化史の』岩波書店、二〇〇二年、四四—四五頁。
- (20) Proceedings of His Honour the Lieutenant-Governor of the Punjab in the Political (General) Department, No. 438, dated 10<sup>th</sup> September 1912, by order of His Honour the Lieutenant-Governor of the Punjab, C. A. Barron, Chief Secretary to Government, Punjab, L/P&S/10/274, India Office Records, British Library. (21) India Office Records, British Library. (22) 報告書 (23) Lieutenant G. E. Sopwith, R. E., Secretary, Badshahi Mela Committee. Report on the Badshahi Mela, L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (24) George E. Sopwith, 'Details of donations and other offers of service in connection with the Badshahi Mela', L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (25) Minute Paper to 'Report on the Badshahi Mela ("People's merry-making") held at Delhi from 1<sup>st</sup> to 18<sup>th</sup> December 1911', L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (26) Lieutenant G. E. Sopwith, R. E., Secretary, Badshahi Mela Committee. Report on the Badshahi Mela, L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (27) Hari Krishan Kaul Manager. Reports on Sports and Entertainments of Badshahi Mela, Delhi, held in December 1911', L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (28) L/P&S/20/HI20, IOR, BL.
- (29) C. A. Gill, Capt., I. M. S., Executive Sanitary Officer, 'The Sanitary arrangements at the Badshahi Mela', L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (30) Lieutenant G. E. Sopwith, R. E., Secretary, Badshahi Mela Committee. Report on the Badshahi Mela, L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (31) H. G. Richardson, Superintendent of Police, Report on the police arrangements made in connection with the Badshahi Mela, 1911', L/P&S/10/274, IOR, BL. 'Strength of Military Force on duty in connection with the Badshahi Mela', L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (32) Hari Krishan Kaul Manager. Reports on Sports and Entertainments of Badshahi Mela, Delhi, held in December 1911', L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (33) Lieutenant G. E. Sopwith, R. E., Secretary, Badshahi Mela Committee. Report on the Badshahi Mela, L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (34) Ibid.
- (35) Damodar Dass, E. A. C., Joint Secretary, Badshahi Mela Committee. Report on the Mina Bazar in the Badshahi Mela, L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (36) Lieutenant-Colonel C. M. Dallas, Commissioner, Delhi Division, to Chief Secretary to Government, Punjab, 1<sup>st-2nd</sup> April 1912, L/P&S/10/274, IOR, BL. H. G. Richardson, Superintendent of Police, Report on the police arrangements made in connection with the Badshahi Mela, 1911', L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (37) Hari Krishan Kaul Manager. Reports on Sports and Entertainments of Badshahi Mela, Delhi, held in December 1911', L/P&S/10/274, IOR, BL. 『キリン入警談』、彼の口撃談を次のように記している。『キリン入警談』のガートン・バーナーによって、「国王王妃は平服で出発した招待客の間を歩き回っていた。その後、彼らは戴冠式の

- ための服装に着替え、フェア「メーラー」を見下ろす城壁の上の玉座に腰を下ろした。幾千人のインド人たちが熱狂的な歓呼の声を揚げて、二人の目の前を通り過ぎた。それは本当にユニークな出来事だった。ヨーロッパ人の国王が国王として東洋人の臣民たちに自らの姿を見せるというのは、歴史上初めてである。ラジャヤや東洋の君主がそのようなことをするのは想像であるが、イングラント人に關しては尋常ではないように思える。彼の側からのこうした振る舞いは途方もなく評価され、城壁の下からは、長い間、火花が上げ続けられ、歓呼の聲が上がり続けていた。」(Coronation Durbar 1911, Papers of Sir Philip Crawford Vickey, MSS Eur D 1004/1, IOPP, BL.
- (36) Proceedings of His Honour the Lieutenant-Governor of the Punjab in the Political (General) Department, No. 438, dated 10<sup>th</sup> September 1912, by order of His Honour the Lieutenant-Governor of the Punjab, C. A. Barron, Chief Secretary to Government, Punjab, L/P&S/10/274, IOR, BL.
- (37) すゞの村落で、インド人の税務官吏(パトワリ)が国王＝皇帝の宣言文を読み上げる手が整っていた。「Coronation Durbar 1911, Papers of Sir Philip Crawford Vickey, MSS Eur D 1004/1, IOPP, BL.
- (38) Bhaskar Mukhopadhyay, 'Cultural Studies and Politics in India Today', *Theory, Culture & Society*, 23 - 7/8, 2006, pp. 279 - 292.
- (39) Milan Vaisnav, *When Crime Pays: Money and Muscle in Indian Politics* (New Haven, CT: Yale University Press, 2017).
- (40) デリーの「あるシンクタンクの所長は、「インドの有権者は根本的には傲慢な好まざる」を指摘する。Anon., 'Mufflerman triumphs', *The Economist*, 14<sup>th</sup> February 2011, 44<sup>th</sup>. Anon., 'Hazed again: Indian politics', *The Economist*, 20<sup>th</sup> August 2011; Jason Burke, 'The Dalits' diamond-flaunting heroine solicits votes of Uttar Pradesh's poor', *The Guardian Weekly*, 17<sup>th</sup> February 2012; Siddhartha Deb, 'India's elite is blinkered by its belief in progress',

- The Guardian Weekly*, 24 February 2012 などとも参照。他方、インド政治には、映画スターたちが公職をめぐる競争し、逆に政治家たちが映画スターたちのイメージを真似るといった伝統が存在する、との指摘もある。Milan Vaisnav, op. cit., p. 374.
- (41) Kenneth Rose, op. cit., pp. 393 - 394.
- (42) Anon, 'More than pomp and frolics: Delhi's centenary as a capital', *The Economist*, 17<sup>th</sup> December 2011.
- (43) インベリアル・ダーバーを終え、デリーを離れるのにあたって、ジョージ五世は新都造営のための定礎式を自らのキャンプで行った。つまり、新都「ニュー・デリー」は、まさしくダーバーが行われた場所を中心として、ダーバーという政治儀礼を恒常化するための装置として造営されることを意図されていた。しかし現実のニュー・デリーは、ダーバー会場からかなり南方の地域を中心として誕生した。新都造営計画が具体化し始めた初期の段階で、ダーバー会場はジャムナ川の洪水の被害に遭いやすいと判断されたから、だった。Charlotte Cory, 'The Delhi Durbar 1903 Revisited', *Sunday Times*, 29<sup>th</sup> December 2002.
- (44) ハーディングを暗殺しようとする試みは、ハーディング自身が警護体制の水準を低下させたことで、結果的にそれを招き寄せた、とも言える。ハーディングがそのようにしたのは、前年のインベリアル・ダーバーに際して、国王＝皇帝の警護体制が比較的軽度であったのにもかかわらず、全く問題が生じなかったことが作用していた。国王＝皇帝のダーバー・キャンプでの警護の実情について、実際にそれに携わったイギリス人警察官が次のように述べていた。一九一一年十二月九日から十日にかけての夜、「私は一晩中当直を務めており、全く一睡もしなかった。…ほぼ十五分おきに「国王＝皇帝のキャンプの」すべての区画を廻り、警戒中の巡査たちの状態を確認した。軍の歩哨も幾人か配置されていた。近衛部隊の将校たちが、兵士たちの勤務状況を確認していた。しかし将校たちの巡視は、二時間に一回だけだった。私は十一時半から当直を始め、すっかり明るくなった七時十五分まで続けた。我々「警察側」の歩哨た

ちは三時間おきに交代したが、警部は十二時から六時まで、区画の中心部分を巡視し続けることになっていた。実際には、ほとんど常に誰かが巡回していた。国王からのお召しに備え、一人ないし二人の副官たちが控えていたからである。区画の中心部分を囲む遮断線は、現実には国王Ⅱ皇帝の滞在するテントの周りを一周する形になっており、ある場所では、国王Ⅱ皇帝の寝室から、ほとんど三ヤードも離れていなかった。」Coronation Durbar 1911, Papers of Sir Philip Crawford Viquey, MSS Eur D 1004/1, IOPP, BL.

- (45) 一九三一年に開業し、現在もニュー・デリーで指折りの高級ホテルとして知られる「インペリアル・ホテル」は、インド現代社会の「富裕にして有名な人々」が様々な機会に集う場所となっている。そしてそこは、「カーズンに関するテーマパーク」のようだ、とも評される。Cory, op. cit. 「カーズン」は、「デリー・ダーバー」に置き換えてもよいだろう。

- (46) Maria Misra. *Vishnu's Crowded Temple: India since the Great Rebellion* (London: Allen Lane, 2007), pp. 259-310.

- (47) モディが掲げるヒンドゥー・ナショナリズムは、インドの歴史を「被害者の歴史」として捉えようとする。すなわち、ヒンドゥーたちはムスリムによって迫害され、ついでイギリス人たちによって迫害されたのであり、従ってヒンドゥーたちが自らを取り戻すには、彼らの過去におけるムスリムのものや、イギリス的のものをすべて拒否しなければならぬと。Ranchandra Guha. *India After Gandhi: The History of the World's Largest Democracy* (New York: Harper Perennial, 2008), pp. 624-650.